

みなと元町

タウンニュース

No.
323

TOWN NEWS



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

「市民が地域とつながり福祉と医療をはじめ 安心して暮らせる街」をめざして



神戸市保健福祉局長

おはらかずのり
小原 一徳

みなと元町タウン協議会の皆様におかれましては、平成3年3月の発足以来、地域の誰もが参加できる会としてまちづくり活動に取り組んでこられましたことに敬意を表するとともに、平素から本市政に多大なるご協力を賜り、深く感謝申し上げます。

昨今、本格的な人口減少・超高齢社会の進行に加え、安定した雇用の減少による生活の不安定化、家庭や地域におけるつながりの希薄化など、福祉を取り巻く状況は大きく変化し、市民の抱える福祉課題も多様化・複雑化しています。保健福祉局では、すべての市民が共助の精神に基づき地域社会の中で支え合う福祉のまちづくりや、健康で長生きできるような質の高い保健・医療の提供に資する施策を展開することで、「市民が地域とつながり福祉と医療をはじめ安心して暮らせる街」を目指しており、様々な取り組みを進めています。

認知症の人にやさしいまちづくりの推進
平成31年4月から、認知症になっても

安心して暮らしていけるための取り組みとして、認知症「神戸モデル」をスタートさせました。

認知症「神戸モデル」は、65歳以上の市民を対象に自己負担無しで検査を受けて頂くことができる「認知症診断助成制度」と、認知症の方が起こした事故を救済する「認知症事故救済制度」を組み合わせて実施し、その財源は、超過課税の導入により市民の皆様からご負担いただくという全国初の取り組みです。認知症高齢者数は市内で推計約6万3千人とされています。加齢により多くの人がなり得る病気であることから、地域社会全体で支えるモデルを神戸から発信していきます。

あわせて、市内7ヶ所の認知症の総合電話相談窓口「こうべオレンジダイヤル(262-1717)」、認知症疾患医療センターでの診断後の専門医療相談・日常生活支援相談も開始しました。今後も、「認知症の人に優しい街」の実現に向け、診断前から診断後まで切れ目のない継続した支援を推進していきます。

ICTを活用した健康創造都市KOBEの推進



健康寿命を延伸し、社会経済的要因による健康格差を縮小していくため、市民が自らの健康状態を把握し、楽しみながら健康になれるよう、市民PHRシステム「MY CONDITION KOBE」を理化学研究所と共同開発しました。

「MY CONDITION KOBE」では、スマートフォン向けのアプリを活用し、利用登録した市民が、自身の歩数や食事等

の「からだ」や「くらし」の情報と、市が保有する各種健診結果などの健康情報をまとめて管理することができます。また、入力した情報に応じて、一人ひとりに合わせた健康アドバイスを受けることができるほか、食事や運動の情報の登録、健康目標の達成等によって、特典と交換可能なポイントを貯めることができ、楽しみながら健康づくりに取り組むことができます。

健康で生き生きとした生活を送るため、ぜひ皆様も「MY CONDITION KOBE」をご利用ください。

元町夜市への参加

神戸市社会福祉協議会は、神戸市役所2号館1階に障害のある方の手作り製品のアンテナショップ「ふれあい工房」を開設しています。出品している方々は、少しでも多くの人に作品を手にとっていただきたいと、懸命に製作に取り組んでいます。当協議会では、そんなみなさんと一緒に、毎年楽しみにしながら、神戸元町商店街の代表的な事業のひとつである「元町夜市」に参加しています。

元町商店街連合会の皆様から温かく迎え入れていただき、夜市に出店させて頂くようになってもう15年が経ちます。大勢の方々に元気に働く姿を見ていただき、手作りの製品を買っていただくことは、障害のある方には大きな喜びであり、自信に繋がっています。

改めて、このような機会を頂いている元町の皆様に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、今後ともより一層のご協力をお願いいたしますとともに、みなと元町タウン協議会の皆様の益々のご活躍とご発展を心から祈念いたします。

海という名の本屋が消えた (68)

平野義昌

山本周五郎5カ月の神戸(1)

1923(大正12)年秋、元町美術商の丁稚・菊田一夫が青年団活動で張り切っていた頃、関東大震災で被災した文学青年が近くの雑誌社に流れ着いた。青年は後に小説家として大成する山本周五郎、本名・清水三十六(1903~67[明治36~昭和40]年)である。26(大正15)年、青年は「須磨寺附近」を『文藝春秋』4月号に発表し、文壇デビューする。青年の神戸滞在は約5ヵ月である。短期間とはいえ、昭和を代表する劇作家と小説家になる浜っ子(菊田は横浜生まれ、山本は横浜育ち)が神戸元町で文学を志していた。補註1

以下、本稿ではこの文学青年を、小説家以前「清水三十六」、小説家デビュー以後「山本周五郎」と表記する。

三十六は山梨県生まれ、4歳のとき、山津波で祖父、叔父、叔母死亡。母は東京に出ていた父と合流。その後、横浜に転居した。

三十六は小学生時代に文学の道を志した。校長が作文教育に熱心で、担任教師が彼の文章力を認め、小説家になることを勧めた。住まい隣人・添田辰五郎の弟が貸本屋を営んでおり、三十六は小遣いを読書に費やした。辰五郎にはもう一人弟(社会風刺の演歌師・嘸蟬坊)がいて、後年その息子・知雄と文士仲間になる。また、同級生・桃井達雄と交友が続き、神戸で同居するし、達雄の姉はデビュー作のモデルである。少年時代のさまざまな縁がその後につながる。

縁はまだある。16(大正5)年、三十六は小学校卒業、辰五郎の長男・貞吉が番頭をしている東京木挽町(銀座の歌舞伎座周辺)の質屋で働く。店主の名から「山本周五郎商店」、質屋「きねや」を展開していた。山本店主は質屋の息子だったが、他店で修業して独立、繁盛店にした苦勞人。人情家で客に返済を催促しなかった。従業員の待遇・教育に気を配り、食事は家族と区別せず、夜学に通わせ、物品鑑定教育をし、観劇や夏休みの避暑旅行にも連れて行った。文学好きで自らも小説を書き、「洒落齋」と名乗った。三十六も夜学の正則英語学校、大原簿記学校に通い勉強した。店主は向学心あふれる三十六を応援し、彼に刺激を受けて読書し、議論を楽しむ、そんな人だった。

周五郎は作家として成功した後も、山本店主を「おやじ」と呼んだ。店主の名をペンネームにしたことも深い尊敬の現われだ。また、質屋商売で見た人間模様や物品鑑定力は作家生活の大きな糧になっただろう。

23(大正12)年三十六徴兵検査、右眼視力が弱く丙種合格だった。同年9月1日、関東大震災。幸い家族も商店主従も無事だったが、店主は、当分復興は見込めないと判断し、店を閉めた。三十六は新天地を求めて関西に向かう。まず朝日新聞大阪本社に行き、震災の体験記を売り込んだ。原稿料は得たが、記事にはならなかった。次に兵庫県豊岡市の新聞記者に勤めるが、報酬なしのブラック企業、数日で退社した。桃井達雄が神戸支社勤めになり、結婚した姉が住む須磨の家に同居。ここに三十六も下宿する。姉の夫はアメリカに赴任中だった。

山本周五郎は小説の中で関西移住について書いている。

「—おれがああとき東京を逃げ出したわけは云いたくないね。理由を云えばそこにいろいろ複雑なこともあるが、恋愛問題などといっても単純に説明はつかない。……逃げだしたとも云えるし、放逐されたとも云えば云えなくもないんだ。(後略)」註1

三十六は東京にいてそのまま質屋になりたくなかった。文学への思いがあった。後年、周五郎は、山本店主が自分を後継に望んでいたこと、作家をめざしていたから震災を機に逃げたこと、須磨に友人の姉(≠憧れの女性)がいたことなどの理由をあげている。「後継」について店主遺族は否定している。註2

さて、三十六は新聞の募集広告で「夜の神戸社」に勤めた。雑誌『月刊夜の神戸』を発行。タウン誌と言えば聞こえがいいが、内容は花街・カフェ情報、芸妓の写真や名士のゴシップ記事。写真

「……怪しげというか、いかかわしいというか、どっちかといえばやけくそみたような雑誌であり、雑誌社であつたものさ。——その社は元町通りと栄町の電車通りとをつなぐ狭い横丁の喫茶店の二階にあつた。もちろん古い木造の日本建築で、表に面した六帖二間をぶつとおして、古畳の上に机と椅子を並べたのが編集室なんだった。」註1

会社の場所は走水神社から東へすぐ、現在燃料会社のビルが建っている。

社長の妻が会社の実権を握っていて、社長は文化事業と言って妻から金を引き出していた。主筆は仲井語楼という元は劇団を主宰した作家「仲井天青」。ねじり鉢巻きで酒の入った湯呑み片手に原稿を書いていた。

「ふん、君も東京の落人か、ふん」/そのとき彼はこう云ってにやつと笑った。註1

「仲井天青」のモデルは雑誌社に在職した元劇作家と後に映画評論家になる人物を合成したようだ。

補註2

社長夫婦が喧嘩して会社で仕事ができなくなり、屋間から仲井は「おれ」を飲み誘う。「おれ」は酔って、小説家志望を話し、仕事の愚痴をこぼした。仲井にお世辞のつもりで「こんな所に埋もれている法はない」と苦言。仲井は自分の正体を知られていると勘違いして喜んだ。「おれ」は話を合わせた。その後も飲み歩くようになり、文学を語り合う。

「ばくには学問はない」天青はこう云って右手の指先で額をこつこつと叩き、ごく秘密なことをうちあけるかのようににやつと笑いながら低い囁き声でこう云うのであつた。「—が、この中には詩が詰っている。」註1

仲井は新劇界を去った後、浅草の劇団で文芸部長をしたり旅回りをしたり。離婚後、浅草の名妓と再婚したものの、東京で生活できず、離れて暮らしていた。

「—十一月の月給日のことだった。——神戸という土地は摩耶山おろしとかいって冬のはじめから凛寒な風が吹く。おれが厄介になっていた大村さんの家は須磨の離宮山の下で、南向きの日当たりのいい環境だから暖かいが、市内では十一月末となると、朝晩の寒さには誰しもかなわないと云つた。」註1

昔は「六甲風」ではなく「摩耶山おろし」と言つたのか。小説に戻る。給料日に「おれ」と仲井は社長ともめ、共にクビになる。仲井は社長に昇給を約束されていて、妻を神戸に呼び寄せていた。この日に彼女が

到着する予定だった。仲井は残留を懇願するが、受け入れられない。「おれ」と仲井は社長をぶん殴って、やけ酒。仲井は家に帰れないと嘆き、酔いつぶれる。「おれ」は彼を抱き起こし、送って行った。

「きみはこれを機会に東京へ帰ってくれたまえ、そして、しっかりやってくれたまえ」/天青は別れるときおれの手をぐつと握った。「決して安きについたり投げた気持ちになつちやいけない、どっちにしたって人生は苦しいもんだ、苦しむんなら自分のほんもので苦しむべきなんだよ、……じゃあさよなら、さよなら、頼むからばくのことは忘れてくれたまえ。」註1

周五郎の小説「陽気な客」は、戦後仲井が死んだという知らせから青年時代を回想するもの。同じ人物が登場する「秋風の記」では、「仲井天才」。東京で二人が再会する

「昨日街を歩いていたら、人混みの中から、/山本君、山本君」/と呼ぶ者があつた。振り返ってみると四十がらみの落魄きつた男がふところ手をしてぬつと立っている。髪も髯も無精に伸ばし放題で、編目なりに糸のすり切れた袴と羽織をずり落ちそうに着流し、素足にちびた下駄という姿である。(中略)「分らんかね、僕だ——仲井だよ。」註3

仲井は一別以来満洲を放浪していた。旧交をあたため、あっさり別れた。このとき仲井が「山本君」と呼んだということは、三十六は神戸時代に「山本」を名乗っていたと考えていいだろう。「陽気な客」に戻る。「おれ」の勤務は実質2ヵ月余りである。

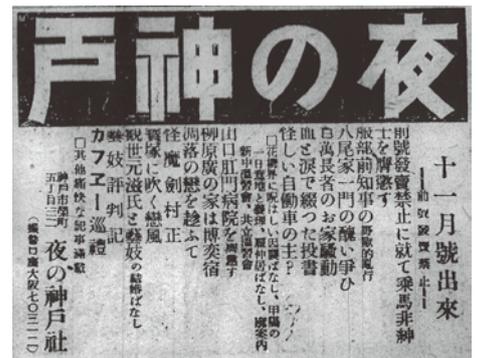
註1 山本周五郎「陽気な客」『つゆのひぬま』(新潮文庫、1972年)所収。初出『苦楽』(苦楽社、1949年8月号)。

註2 木村久典編『山本周五郎 青春時代』福武文庫、1990年

註3 山本周五郎「秋風の記」『朝顔草紙』(新潮文庫、1984年)所収。初出『ぬかご』(ぬかご社、1934年9月号)。

補註1 「山本周五郎賞」、「菊田一夫演劇賞」、それぞれの名を冠した賞が設けられている。生前の功績を讃えられ、後進の目標・励みになっている。神戸時代、兩人に接点はなかっただろう。作家・脚本家として、山本原作「さぶ」を1966(昭和41)年菊田脚本でフジテレビドラマ化、68(昭和43)年菊田脚本・演出により芸術座で上演している。

補註2 「仲井天青」は実名「中居天声」。周五郎は、小山内薫の自由劇場に対抗して人間劇場を主宰していた、と紹介しているが、詳細不明。映画評論家は「水町青磁」(1903~51か52年)、新聞記者・雑誌編集者を経て『キネマ旬報』で映画評論を執筆、のち編集長。関東大震災で映画配給会社が神戸に拠点を移し、映画雑誌社も移転していた。キネマ旬報社は西宮市香櫛園にあった。「夜の神戸社」元社長の証言では、中居退社後に三十六と水町が入社、三十六は既に「山本」を名乗っていた。(木村前掲書参照)



三十六は職中の『夜の神戸』神戸新広告は見つけられなかった。翌年11月号広告。8.9月合併号と10月号は雑誌名『夜の大阪夜の神戸』となっている。10月号は発売禁止になった様子。前県知事のスクランダル記事が原因だろうか、11月号でも続報掲載。